名言は短い語句の中に、さまざまな教えが凝縮されている。
その言葉は幾星霜にわたってきらめいている珠玉のようだ。
願わくばこの名言を、現在のあなたの暮らしの中で生かしてほしい。

辻本敬順

Contents

吉凶は人によりて日によらず（『徒然草』） 2
その一人こそ親鸞なれ（「報恩講の歌」） 5
自らを灯明とし、法を灯明とせよ（『長阿含経』） 8
暑さ寒さも彼岸まで（『諺苑』） 11
心を直さぬ学問して何の詮かある（『聴聞集』） 14
明日ありと　思ふこころのあだ桜（『親鸞聖人絵詞伝』） 17
顚倒上下は無常の根本（『無量寿経』） 20
人世間に生まれてより、口中に大斧あり（『正法念処経』） 23
忍をもって鎧となす（『大智度論』） 26
人間五十年、夢まぼろしのごとくなり（『敦盛』） 29

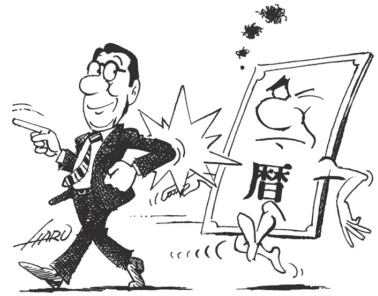
挿絵／岡本 治

本書は、西本願寺『本願寺新報』に「仏教名言豆事典」と題して平成8年4月から11年3月まで毎月一回連載された36編から、本願寺出版社によって10編を選び、著者による脚注を新たに加えて編集したものです。

吉凶は人によりて日によらず

*兼好法師の『*徒然草』の九十一段を読みましょう。

「赤舌日ということは、陰陽道にも定説のないものである。昔の人はこの日を忌まなかった。近頃、何者が言い出して忌みはじめたのであろうか。この日にすることは成就せずと説いて、この日に言ったこと、したことは目的を達せず、得たものも失い、企てたことも成功しないというのは愚劣なことである」から始まります。



*兼好法師
（1283頃～1352以後）鎌倉末期の歌人。俗名・卜部兼好（うらべ・かねよし）。先祖が京都吉田神社の社家であったから吉田兼好ともいう。後二条天皇に仕えていたが天皇崩御の後、出家。歌道に志して二条為世に入門、その四天王の一人。

*『徒然草』
兼好法師の随筆。出家前の1330～31年の作。「つれづれなるままに」にはじまり、思索的随想や見聞など二四三段。名文の誉れ高く、『枕草子』とともにわが国随筆文学の双璧。

赤舌日は赤口と同じで、陰陽道では万事に凶という日です。特に、公事・訴訟・契約などは凶というのです。兼好法師はこの赤舌日を痛烈に批判します。

「吉日を選んでしたことで成就しないのを数えてみたって、また同様の統計を得られよう」といいます。

早い話、大安に挙式したカップルの離婚率を調べてみよ、というのです。

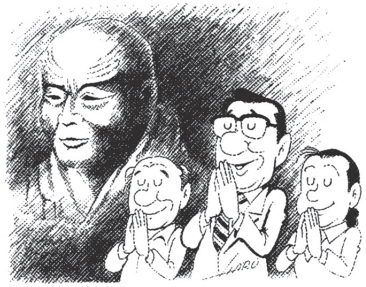
「この世は無常で、万物は絶えず変化する。何が実在し、何が最終結果であるか確かでない。志は遂げられず、願いはかなえられない。人の心は絶えず動揺していて、ものはみな幻にすぎない。この道理を知らないから、吉日だの悪

日だのとこだわるのだ」と諭し、昔から「吉日でも悪事をしたら凶運。悪日でも善事を行なえば吉」というではないか。だから、吉凶は「その人の行ないによるのであって、日のよしあしによるのではない」と、きっぱりと結論づけています。

お正月です。新しい暦を前に、今年の行事予定を思い悩んでいるあなた。考えてみたい一句ではありませんか。

その一人こそ親鸞なれ

和歌の浦曲の　片男波の
よせかけよせかけ　帰るごとく
われ世に繁く　通いきたり
みほとけの慈悲　つたえなまし

「報恩講の歌」（黒瀬智円作詞、野村成仁作曲）が聞こえてきました。どこかで報恩講が勤められているようです。

親鸞聖人は私たちに仏さまの教えを伝えるために、た